

「レイモンド・カーヴァー」というアメリカを追いかけて(2)

YODA, Takeshi / 余田, 剛

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

2016-01-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012478>

「レイモンド・カーヴァー」という アメリカを追いかけて (2)

余 田 剛

2. なぜカリフォルニア州パラダイスへ？

カリフォルニアへの移住は作家を夢見る青年にとって希望に満ちたものであったはずだ。カーヴァーは高校卒業直後にカリフォルニア州チェスター(Chester)へゆき、両親、弟と暮らし製材所で働いていたことはあったが(Sklenicka 42, 47-48)、メアリアン、娘のクリスティ(Christi)を連れてカリフォルニアへ移住するのはこれが初めてだった。その移住の際に先に旅立ちチェスターの製材所で働いていた父親は工作中に鋸でけがをしてから心身ともに病みしばらくまともに働けず、カーヴァーがそこへ到着したとき父親はそれまでの面影がないほどみじめな姿をしていたことをエッセイ「父の人生(“My Father's Life”)」の中で語っているように(Fires 16-17)、親のカリフォルニアへの移住はとても成功であるといえないものであった。それでも、ゴールドラッシュの時代から手早く成功を手にしようと望む者たちにとって今だ魅力的な場所であったカリフォルニアへ自らが作った家族とともに移住し新たなスタートを切ろうという希望を持っていたことは、かつて彼が一攫千金を夢見て結婚前に友人2人とダイヤモンドを採掘しにブラジルへ旅したことのあるエピソードを考えれば(M. Carver 39)、それほど想像に難くはない。

しかし、この移住の理由については、単に「夢の実現」、あるいは「上昇志向」といった言葉だけでは説明しきれない面がある。もし、成功を目指して都会へ行くなら東海岸まで行かなくとも、ワシントン州にもシアトル、カリフォルニア州ならサンフランシスコやロサンゼルスのような、夢の実現の舞台にふさわしく見える都市はいくらでもありそうである。つまり、時間をかけて努力をし、自分なりに高めに設定して実現を目指すといった建設的、計画的な「夢」

ではなさそうである。メアリアンによれば、直接的な移住の理由になったのは、夢というよりも「運命（“Fate. Destiny.”）」(85) でありこんな経緯があったという。

まずメアリアンの妹であるエイミー（Amy）が地元での寄宿学校の生活に飽き飽きし、かつてのルームメイトのいる高校へ行くためカリフォルニア州サンマテオ（San Mateo）に引っ越したがっていた（Sklenicka 60）。それは、その友人に会いたいからというよりも、実はそのルームメイトの元交際相手である金持ちの放蕩息子に興味があって会いたかったことが、本当の理由だったとメアリアンは説明している（M. Carver 85）。そしてエイミーの懇願に負けて母親アリス（Alice）がサンマテオへ下見の旅行に連れていく。しかし母親アリスも新たな人生の転機と環境の変化を必要としていた（Sklenicka 60）。その途中チコ（Chico）を通りかかった際にたまたまチコ近郊のパラダイス（Paradise）にある一軒家の販売広告の看板を見かけ、メアリアンが「後になってひどく後悔をしないような重い決断をしたことは1度もない（“never did anything decisive she didn’t later regret with loud lamentations”）」（M. Carver 86）と言う母親アリスは、まずはサンマテオのアパートでエイミーと暮らした後に当時の交際相手と住む場所として、ワシントン州立教職員退職年金基金口座から引き下ろした金をつぎ込んでその家を買ひ、メアリアンや孫に近くにいてほしかった望みもかなえるためカーヴァー一家にそこに住むよう提案する（85-86）^①。そしてそれまでヤキマの医者が所有する病院の地下にあるアパートに家賃なしで住むことと引き換えにしなければならなかった病院の掃除をしなくて済むようになるということと、そこからならチコ州立大学（Chico State College）に通えるということにも魅力を感じ、カーヴァー一家はこのパラダイスの家に引っ越してくることになる（86）。

友達をうらやんでベイエリアの高校にいたいという思春期に特徴的な現実的ではない漠然とした憧れ、あるいは金持ちのプレイボーイに対する興味というなおさら軽はずみな思春期の憧れが、たまたま転機を必要としていた大きな決断を思い付きでする癖のある母親アリスを動かし、カーヴァーがその誘いのって、偶然アリスが見かけた看板の家に住むことになる。周囲の願望や思い付きが、偶然と絡み合って、カーヴァーを移動させたのだが、この契機が非常に軽々しい。どんなに契機が降ってわこうと、成功のために強い信念を持ち堅実に夢の実現に向け突き進んでいるような人間であれば、たとえ家賃が無料で

あってもその誘いにのらず、作家という夢の実現のため、たとえば別のもっと名のある大学を目指してヤキマで勉強してお金を貯めるということがあってもよさそうである。一家の船出があまりに軽々しい契機の重なりに導かれたということが、何かカーヴァーのいまいち理由のはっきりしないそれゆえに重みにかけるこの先の移住の性質を象徴しているようだ。カーヴァーにとっての移住、そしてアメリカンドリームについては、パラダイスへの引っ越しを皮切りに始まる移住をもう少し追った後に改めて考察することとして、ここではとにかく彼の移住や夢が重みに欠けるものであることを確認しておきたい。

3. メアリーヒル美術館

カーヴァーは、妻子はもちろんのこと義母アリスと義妹エイミーもぼろぼろのシボレーにのせワシントン州ヤキマからカリフォルニア州パラダイスへ向かった (Sklenicka 61)。ただでさえ赤ん坊を含めた 5 人が長い時間車内にいたら息苦しくなるはずで、少しでも疲労を紛らわせるためだろうが、途中で観光をしながら移動したという (61)。ヤキマから約 130 キロメートル南に行ったところにはワシントン州とオレゴン州の州境上にコロンビア川 (Columbia River) が流れており、ワシントン州側の川岸にメアリーヒル美術館 (Maryhill Museum of Art) というカーヴァーが「世界で最も奇妙な美術館 (“the strangest museum in the world”)」 (Adelman and Gallagher 33) とお薦めする場所がある。カーヴァーが暮らした場所ということではないが、「近くへ行ったら是非寄ってみなくちゃならない (“You must see this if you get down there in that part of the country.”)」 (33) と言っているので寄ってみた。

ここには、ロダンの彫刻、西洋の絵画、東方正教会の聖像、ルーマニア王室の豪華な調度品から、ワシントン州やオレゴン州といった地元の現代の彫刻家たちによる作品、カトリックのロザリオ、インディアン装飾品や衣服や食器まで、さらにはフランスのダンサーの写真やポスター、2 次大戦後のフランスのファッションデザイナーによりデザインされた服をまとうマネキン、世界各国のチェスにいたるまで多種多様な作品が展示されている。その 1 つ 1 つはとてもしゃれていて面白いものではあるが、しかし、美術館に入っただけで何かつちに落ちないような不思議な感覚に襲われたまま退館することとなった。共通

図版1 メアリー・ヒル美術館⁽²⁾

項がなかなか見いだせなかったのである。時代や作品の種類・系統などで共通項を拾っているわけではなく、それではただ創設者の所有品を展示しただけでその趣味だけが唯一の共通項だったのか。

あとで美術館開設のホームページ等をみて、この美術館成立の歴史に当たってみた。創設者は、グレートノーザン鉄道（The Great Northern Railway）の大物ジェイムズ・ヒル（James Hill）の義理の息子（娘の結婚相手）であり、太平洋北西部地域で初のアスファルト舗装のマカダム道路を建設し同地域のハイウェイ建設促進に生涯従事した、サミュエル・ヒル（Samuel Hill）である。ノースカロライナ州出身の彼はこの地にクウェーカー教徒共同体の農村を建設するべく買い取った土地一帯を娘の名にちなんでメアリー・ヒルと名付け、自らの屋敷を丘の上に作ろうとした。ハイウェイも灌漑も整っていない辺境な地での共同生活を希望する者はなかなかおらず屋敷の建設も難航する。ここからメアリー・ヒル美術館成立にいたるまでには主にサミュエルの友人である3人の女性がかかわっている。まず、建設が難航していた際にサミュエルに屋敷を美術館に改築することを提案し有名な芸術家との交友関係を生かしてロダン作品の取得を手助けしたモダンダンスのパイオニアとされるロワイエ・フラー（Loie Fuller）、そして一般公開に先駆けて行われた1926年の開館セレモニーの座長を務め、ルーマニア王室の記念品や聖像を寄贈したマリー・ルーマニア女王（Queen Marie of Romania）、さらにサミュエルの死後1940年の一般公開にまで美術館を導き西洋絵画などを寄贈したサンフランシスコの砂糖商実業家の

妻アルマ・デ・ブレットヴィル・スプレッケルズ (Alma de Bretteville Spreckels) の3人である。創設者本人のみでなくそれに関わった3人, そしてさらにその後美術館の運営に携わる者たちの所有物や趣味をつなぎ合わせてこの美術館はできたようである (“Mission and History”)。

国も異なり唐突なようであるが, その特異さゆえ印象に深く残っているイギリスのオックスフォード (Oxford) にあるピット・リバーズ博物館 (Pitt Rivers Museum) と比較し, メアリーヒル美術館がどう特異なのかももう少し具体的に考えてみたい。そこには, 考古学者であり, 人類学者のオーガスタス・ヘンリー・レーン・フォックス・ピット・リバーズ (Augustus Henry Lane Fox Pitt-Rivers) が, オックスフォード大学に寄付した2万点に及ぶコレクションが所狭しと詰め込まれている。彼が世界各国から集めてきた装身具や仏具や, 紙幣や鍵など, 展示品の共通項はもはやコレクターの趣味のみであり, その壮大さは百科事典的に横への無限の広がりを感じさせある意味そこまで突き抜けているとわかりやすい。

メアリーヒル美術館の展示品は, 性質上の共通項が見つけないという点で横の広がりを感じさせるが, しかし作品を美術館にもたらした人間が複数に分



図版2 メアリーヒル美術館成立に関わった主な人物と主な展示物を1枚の絵に収めたイラスト《出典: Aaron McConnell, *Maryhill Museum of Art*, 2010, Maryhill Museum of Art, Goldendale.》

散し中には作為的に持ってこられたものも混じっていて、完全に無作為あるいは無作為という名の作為と言い切れないところがある。つまり、個々の作品が個を超えたところで何か大きな意味を形成するのを徹底的に拒否し、意味は横に広がる多様性の中に拡散しているのみと叫ばんばかりの強い自己主張も一方では感じられない。それゆえ今度は個々の展示品の特性を全体としてまとめ上げるような縦方向に伸びる中心的な意味の柱が欲しくなるが、それもなかなか見つからない。

今述べた縦の広がりや横の広がりという概念を文学作品の傾向にあてはめて考えてみると、横に広がりきらないため縦への広がりを求めてさまよわざるを得ないというこのもどかしさは、カーヴァー作品を読んでいる時のもどかしさと共通するのように感じられる。カーヴァー作品についてもまた、伝統的なリアリズムやモダニズムのように作品内の出来事の1つ1つを全体としてまとめ上げる重々しい決定的な意味が欠けているという点で横の広がりを感じさせるが、一方で前衛的ポストモダニズムのように意味は無限な多様性の中でしか存在しないと言わせるほど突き抜けてもいない。そこまで突き抜けていると思わせる作品もたとえば前衛的実験を自らの作品の中で実践しカーヴァー作品のいわゆるミニマリスト的な傾向を極限まで推し進めたようなゴードン・リッシュ（Gordon Lish）が編集を施した一部作品に見受けられるものの、それらのいわば肉をそぎ落とされてしまった作品にカーヴァー自身がもう1度肉をつけたして書き直した改作やそれ以外の多くの彼の作品については、むしろ意味を急進的に横に拡散させるような大胆さを持ち合わせていない。登場人物や出来事に対するカーヴァーの眼差しにはそれらからすべて意味をはぎ取ってやろうという野心が感じられず、むしろ人物たちの人生をこの世界でひっそり意味づけようとしているかのような愛情が感じられるのだ。それゆえアメリカという国の歴史の中で何か重要なことを実は控えめに意味したがっているようにすら感じられ、縦に広がる意味を求めてさまようことになる。

メアリーヒル美術館の展示品はしゃれたカーヴァーには似つかわしくないようなものばかりなので、これがカーヴァーの作品を象徴しうる美術館であるとまで言うのは慎むとしても、カーヴァーが「最も奇妙だ」と言って気になった博物館が、メアリーヒル美術館の成立経緯が少しかわってたとえばサミュエルの開拓の夢と挫折と成功という分かりやすくアメリカ的なテーマに特化しそのようなイデオロギーを中心的な柱として据えているような美術館でもなければ、

ピット・リバーズ博物館のような壮大無比な展示物によってその無限に広がるかのような多様性を自己主張する美術館でもなかったことは、非常に興味深い。

美術館を後にしたカーヴァー一行は、川を渡りオレゴン州側の川岸沿いのハイウェイに入ってカリフォルニアを目指す。

図版3は美術館から川を挟んでオレゴン州側を撮った写真であるが、カーヴァーたちはかつては橋がなかったコロンビア川を、橋の向こう岸のたもと周辺に広がっているビッグズジャンクション (Biggs Junction) という町まで車ごとフェリーで渡ったそうだ (Adelman and Gallagher 37)。ここから川沿いに約45キロメートルくらい西へ行ったところにあるクリキタット川 (Klickitat River) の周辺を舞台とした「クーガー (“The Cougar”)」という詩の中では、川を挟んで景色を眺めながらオレゴン州を越えて、さらに向こうにあるカリフォルニア州に対して抱かれる憧れが描かれている。

October,
gray sky reaching over into Oregon, and beyond,
all the way to California. None of us had been there,
to California, but we knew about that place—they had
restaurants
that let you fill your plate as many times as you wanted. (*Fires*
118)



図版3

カリフォルニアに対する憧れが何杯でもおかわりさせてくれるレストランとむすびついているのが、作品にも食べ物を食べる人物を描くことが多かったカーヴァーらしくて即物的で面白い。詩の後半部では、後にカリフォルニアのバイキングで、クーガーをその時そこで目撃したことをなかなか信じない友人たちに酔っぱらいながら必死に言って聞かせるという設定に切り替わり、それに伴ってカリフォルニアへかつて抱いた夢は色あせそれに代わってワシントン州の失われた自然の象徴のようなクーガーが憧れの対象に成り代わっている。カーヴァーはやがてはこのような色あせてしまうのだが、そのときのドライブをやり通させるには十分刺激的なカリフォルニア州への憧れをいだきながらこの向こう岸の景色を眺めたことだろう。

4. パラダイス, チコ

オレゴン州を下りカリフォルニア州に入ってカリフォルニア州道 99 号線 (California State Route 99) を下ってくるとチコの町があり、パラダイスの町はその近郊にある。メアリアンはパラダイスに近づいた時の様子をこう描写している。

How Paradise got its name was pretty self-evident from the first time we drove there. Down in the valley was Chico, and up nestled in the clouds was, naturally, Paradise, at the end of ten miles of road straight up. (M. Carver 88-89)

同じ道かはわからないが、チコの町の南でハイウェイを東にそれ、その名もスカイウェイ・ロード (Skyway Road) という写真 (図版 4, 5) のように開けた道を約 22 キロメートル緩やかに上ったところにパラダイスの町がある。アリスが退職金で老後の生活をするための家を買った場所で、近くには高齢者用のアパートも見られる。都会から離れ静かに暮らすのには良い場所なのだろうが、とにかく若いカーヴァーとメアリアンには静かすぎたことだろう。2 人が暮らした家が合った場所へ行ってみた。

写真 (図版 6) のロー通り (Roe Road) を進むと、その通りが端っこでかき型状に曲がってその先にひろがる林と畑に食い込んで行き止まりになっている



図版 4



図版 5



図版 6

る場所があり、その曲がり角のあたりが住所の示す場所である。カーヴァーたちは 1958 年の秋にここへやってくる。

写真（図版 7）の道の奥がそのかぎ型で行き止まりになっている所だがこの辺まで来ると人氣がほとんどなくなりかなり静かだ。ところが、数十メートルくらい近づいたところでそのあたりで飼われていた小さい犬が吠えはじめさらに近づいたところでその声に反応し後ろにひかえていた大型犬がさらに激しく吠えながら、噛みつきそうな勢いではあるが一定の距離を確実に保つようにして 2 匹で後をつけてくる。警報でも鳴らしてしまったかのようで、人が出てきて通報されるのではないかと思うほどだったが、逆に言えばその音をそれほど際立たせるほどの恐ろしく静まりかえった場所だった。メアリアンは、チコの町でチコ州立大学（Chico State College）に通い薬屋で働いていたカーヴァーが、夜遅く帰ってくるまでまだしゃべれない赤ん坊のクリスティと 2 人きりでさら



図版 7 パラダイス、ロー通り 840 番地 (840 Roe Road, Paradise) 付近

にお腹に子供を宿しながら、かなりさみしい思いをして待っていたようだ (M. Carver 89)。その時の心境を彼女はこんな風書いている。

I felt I had been transported to another planet where they grew kumquat trees and dust, and all the people had disappeared. I wondered when I would have a close girlfriend again. When I finally heard the car drive in at night, my heart would begin to pound, and I half questioned if it had been beating at all. (89-90)

メアリアンはきっとこの犬たちのように耳を澄まして車で帰ってくるカーヴァーを待っていたのだろうが、成功を夢見てたどり着いた新天地パラダイスは人生を謳歌できる楽園であったというよりも、カーヴァーが帰ってくるまでは心臓が止まっていたかのような感覚のするむしろ死人がたどり着く天国のように、特にメアリアンには寂しいところとなったようだ。

長男ヴァンス (Vance) の出産については、ヤキマで妊娠が分かったときに子供を2人も面倒見れるか自信がなく、一方当時アメリカで中絶が禁止されていたため⁽³⁾、日本やスウェーデンに手術をしに行くこともカーヴァーが提案したがメアリアンは拒否し (M. Carver 82)、1958年の10月にチコ州立大学の少し北にあるエンロウ病院 (Enloe Hospital) で出産する (93)。

大学のレベルにあった知的な批評が載ることのない『山猫』と、その学内誌のレベルを支えることのできない一般学生の全体的な知的水準の低さとをシニカルに嘆く文章で、大人びているといっても若さ故か、カーヴァーには珍しいアグレッシブさが見られる。

1959年の年明けから⁽⁴⁾、2人は家賃をより多く払ってでもよりにぎやかな場所に住むことを求めたのだろう、パラダイスよりはだいふ活気のあるチコの町でアパートや家を借りて4か所ほど転々とする(102, 106-07, 111-12, 115)。その間大学2年目の1959年の秋学期からカーヴァーは創作講座101(Creative Writing 101)という創作コースを受けそこで5歳年上のジョン・ガードナー(John Gardner)の教えを受け作家として大きな影響を受ける(105)。ガードナーからの影響については、「炎(“Fires”)」や「ジョン・ガードナー——教師としての作家(“John Gardner: a Writer as a Teacher”)」でカーヴァーが触れているが、たとえば、「大地(“earth”)」と「土地(“ground”)」の違いをこんこんと説明されたことや(*Fires* 38)、1つのピリオドを入れるかどうかで大議論になったことなどを挙げ(45)、言葉を的確に選び抜くことを徹底的に習ったことを伝えている。後に彼は、言葉を極限まで簡素に削っていく「ミニマリズム(“minimalism”)」という言葉で、その作風を説明されることになるが、カーヴァー自身は自らを「ミニマリスト(“minimalist”)」ではなくて「プレジジョンリスト(“precisionist”)」であると呼ばれることを好んでいたようである(Gallagher 18)。

そうであれば、この「的確に言葉を選べ」という教えが「プレジジョンリスト」というレッテルに多かれ少なかれ関係していると考えるべきだが、この2つの概念にはカーヴァーにとってどんな違いがあるのか。そして、ガードナーの教えはカーヴァーの作風について考えるときどんな意味を持つのか。

拙論を振り返ってみる。ヤキマの人々について考察する際、インテリの雄弁さもなく反抗の声が様になるほど明らかな被害者でもないがゆえものを言わず、祖先の行いの報いに押しつぶされてしまったかのように元気のない人々のイメージが、カーヴァーの世界観と作風を考えるうえで重要であることを主張した(余田 107-10)。短編「誰も何も言わなかった」を「神話解体」(109)の物語とし、「言葉以前にあると想定された意味を解体し虚構性を暴き出す」(107)点で雄弁な典型的ポストモダニズム作品と共通するという範疇づけを行ったが、ヤキマのものを言わない人々のイメージを注視して、もう少し厳密に考えると、

この範疇づけでは不十分であることが分かる。つまり、このヤキマの人々は、祖先の行いの報いに押しつぶされ、とうの昔に、もしかしたら生まれる前から、力を奪い取られているような人々であり、彼らにとっての神話の意味などは初めから解体されているようなものである。「神話解体」を唯一の目的としてその解体作業が作中で行われるというより、無力な登場人物が初めから勝ち目のない世界に放り出されそれでも何かしらの意味を不器用に無益に探究させられている、と言った方が妥当だろう。解体をして終わりではなく、解体された地点から意味の探求が繰り返されるのであれば、どんなに無益なものであっても、この探究するという、抜け殻ではあるが行為自体はポジティブな試みに、何かしらの意味があると考えなくてはならないのではなかろうか。

本論中メアリーヒル美術館について考察した際、カーヴァー作品を便宜上、「縦」と「横」という概念を使って説明してみた。「意味を急進的に横に拡散」しきれず、「縦に広がる意味を求めてさまよ」っているように感じられるのは、上記の理由による。カーヴァー作品の批評はこの縦か横、どちらか一方の傾向にスポットライトを当てたものばかりで、横、つまり、ポストモダニズムの観点から解説を試みるものが特に近年は多いが、縦、横両方の傾向を重視しなければならないと考える。

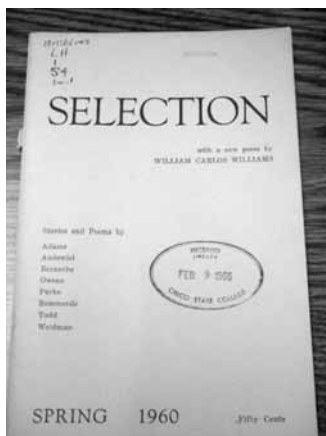
ガードナーに話を戻すと、言葉を的確に選べという指示のほか、「ジョン・ガードナー——教師としての作家」によれば、「もし言葉や感情が正直なものではなく、作家が関心もなく信じてもないことを見せかけで書いているのなら、だれもそんなものに関心は持てないだろう (“... if the words and the sentiments were dishonest, the author was faking it, writing about things he didn't care about or believe in, then nobody could ever care anything about it.”)」(*Fires* 45) といったような書く側の倫理を重視する発言もあったとカーヴァーは伝えている。ガードナーは、その名も『道徳小説について (*On Moral Fiction*)』というエッセイでそのような考えをまとめており、真の芸術は、「物事の価値に関して注意深く徹底的に正直な調査と分析 (“careful, thoroughly honest search for and analysis of values”)」(Gardner 19) を行うもので、道徳芸術とは、権威的教訓とは全く別物で、科学者の実験のように明瞭に、価値観を試し、善悪の判断について受け手の信頼を引き起こすものである、と述べており(19)、同時に、ジョン・バースの『ヤギ少年ジャイルズ (*Giles Goat-boy*)』を「空っぽであるがよくできた殻 (an empty but well-

made husk)」(17)と表現したり、バースが『キメラ (Chimera)』で使った有名な「宝のカギは宝 (“The key to the treasure is the treasure.”)」という文句を引用し、「芸術が我々に開いているものは『現実』であり、カギの価値をはるかに超えた宝である…… (“What art opens up for us is ‘the real,’ a treasure vastly beyond the value of the key”)」(14)と批判したりして、典型的なポストモダニズム小説に強い反感を示している。ポストモダニズムにより従来の価値システムが根底から否定されてしまった後に、ガードナーのように、作者と読者の間の倫理観でつながれた関係や現実を信頼する伝統的なリアリズムの価値観をさほど工夫なく昔のままに復活させようとする試みは無根拠で多少ナイーブに見えてしまうし、ガードナー自身の小説についてもそのような価値観とはやや食い違う実験的な作品も見られるのだが、ともかく、カーヴァーが教師としてのガードナーから影響を受けたものがあるとするれば、この正統派リアリズムの、要するに縦方向の価値観であろう。

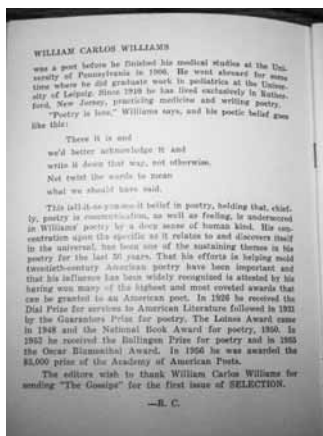
ガードナーの創作原理がカーヴァー作品の根底にあってそれをもっとも強く特徴づけている、と一面的に見ないようこらえなくてはならない。先に述べたように、ヤキマという土地から自然に生みだされたと著者が解釈するカーヴァーの世界観と創作スタイルの萌芽とでもいうべきものには、すでに縦方向の傾向と横方向の傾向の両方が見られる。この縦方向の傾向がガードナーの縦方向の教えに共鳴し、そして、横方向の傾向が、その後、編集者ゴードン・リッシュの目に留まって、引き伸ばされてゆき「ミニマリズム」という言葉がよりあてはまる作品が生み出された。「ミニマリズム」は登場人物等から意味とそれゆえ言葉を「はぎ取ってしまう」というネガティブな含みを持つが、「プレジジョンリスト」はそれらに少ないながらも的確に選んで意味と言葉を「与える」というポジティブな含みがあり、ガードナーのイデオロギーが背後に見えるそのレットテルでカーヴァー作品の特徴を説明しきれるようには思えないが、非常に見えにくい縦方向の傾向の存在をそのレットテルでカーヴァーがささやかに主張しているとは読めないか。

ガードナーのもとで学んでいた大学2年目1960年の春学期に、彼は大学の文芸雑誌『セクション (Selection)』を創刊し、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ (William Carlos Williams) に詩の寄稿を依頼し、「噂話 (“The Gossips”)」という詩を書いて送ってもらいそれを掲載した。詩の中で月の裏側がどのように見えるかについてのロシアからの情報に耳を傾ける男の描写が

あるが⁽⁵⁾、1957年と58年にはソ連のスプートニク号（Sputnik）が打ち上げられており、冷戦の相手国ソ連の打ち上げ成功にアメリカが受けた大きなショックが冷めやらぬ時期であった。いわゆるスプートニクショックによりおこなわ



図版 9 表紙



図版 10 編集者序文



図版 11 ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ作「噂話」

図版 9～11 『セレクトション』第1号（カリフォルニア州立大学チコ校図書館所蔵）
《出典：Raymond C. Carver and Nancy Parke, eds, *Selection 1* (1960).》

れた政府の社会政策見直しの一環として、教育に財政支援を行うため 1958 年に国家防衛教育法（National Defense Education Act）が制定され、大学生は 1 人 1 年で 1,000 ドルまで低利率で奨学金を受けることができるようになったが、カーヴァーはチコ州立大 1 年目の 1959 年 9 月に 250 ドルを貸与されている（Sklenicka 65）。



図版 12



図版 13

図版 12・13 カリフォルニア州立大学チコ校（Clifornia State University, Chico [旧 Chico State College]）

雑誌の創刊も成功し、創作仲間とも自宅でパーティーを開いたり、ガードナーからは気に入られ研究室を使わせてもらったりと、チコでの日々はそれなりに充実したものであったように映るのだが、カーヴァーは 2 年目が終わったところでチコ州立大学を離れ、フンボルト州立大学（Humboldt State College）が近くにあるユリーカ（Eureka）へ引っ越す決意をする（M. Carver 127）。メアリアンはその理由を 4 つ挙げている。1 つ目は、メアリアンが孤独に耐えられなかったこと、2 つ目は、隣の芝は青いという感覚から新鮮さを求めたということ、3 つ目は、より稼げる仕事があったことであり（127）、そして 4 つ目は、雑誌の収益を使い込んで居心地が悪くなったことである（128-29）。移動しなくてはならない決定的なものが見つからないが、2 つ目の理由を述べる際に付け加えて、「実を言うと、私たちはどちらも見てみたかっただけです（“The Truth is, we both wanted to take a look.”）」（127）とメアリアンも書いているように、そこへ行かなくてはならない決定的な理由はないがとにかく動かないではいけないということだろう。

5. トリニティー山脈

ユリーカは西海岸のオレゴン州との州境近くにある都市で、チコからそこへ行くには険しいトリニティー山脈（Trinity Mountains）を越えてゆかなければならない。ギリシャ語で「発見した（“I have found it !”）」の意味を持ちカリフォルニア州自体の標語にもなっているが、パラダイスに引き続きまたもや分かりやすすぎて、その薄っぺらさが、実は夢を実現しうる新天地としての看板が見かけ倒しであるということすら逆に象徴しているかのように感じられてしまう、その名前の町を彼らはめざす。同じルートか分からないが、チコから最短でユリーカに着くと思われるルートをたどって、カリフォルニア州道 36 号線（California State Route 36）という道を使って山越えをしたが、高いところでも 4,000 メートル程にまで達するこの山越えルートは運転初心者であった著者にはハードで印象深いものだった。

写真（図版 14）のように眩暈を起こして道や丘のラインがぐねっと曲がってしまったかのような不思議な風景が時に突如として出現する人気のない道がひたすら続き、やがて標高が高くなってくると初心者には厳しい急な曲道の連続で、必死に制限速度くらいで走っていたつもりでも周りは優に制限速度を超えてビュンビュン飛ばしており、ほかに車なんか走ってないのではと錯覚するほどぼつんと取り残されているかと思えば、気が付けば時折後ろに車が迫っていて、そのつど脇道にスペースがあれば停車するということの繰り返し。レストランやガソリンスタンドなど見当たらない道が何時間も続き、そのうちガソリンも少なくなってきた山の中で止まったらまずいと思い、途中にあった写真（図版 15）の山小屋のような店で、かなり割高なガソリンを買うことになった。ここへ実際やってくる直前の時点では、メアリアンが伝記の中で移動中に車が壊れてえらい目にあったというエピソードをどこかで書いていたことをぼんやり覚えていたため、どの道か確かめてその道を走ってみようと思いながら、結局その箇所が見つからないまま出発することになったが、帰ってきてからもう 1 度探してみたら、それが起きたのはユリーカへ向かう途中の山脈を越える道だったことが分かった。カーヴァーとメアリアンは子供をアリスに預け 2 人で、電力会社ピージー・アンド・イー（PG & E）から買い取った古いフォード車で山越えをしていた際に、車がエンストをおこしヒッチハイクで一番近くの町



図版 14



図版 15

まで行き、修理するお金もなかったため、そこからメアリアンの母の友人を電話で呼んで迎えにきてもらい、修理代を払ってもらって助けてもらったそうだ (M. Carver 129)。カーヴァーのほうが苦勞の度合いは何枚も上を行っているが、初めからここでカーヴァーがひどい目にあったと先入観を持たず、様々な道を移動する中で特に印象深い思いをしたのが結果として偶然同じ、あるいは近い場所だったということで、土地の経験をより純粋にできたようであって出発前にその場所が見つけられずよかったとさえ感じられた。同じ土地でもそこに住む人間が 100 人いれば経験の種類は 100 通りである。しかしまったくばらばらであるかと言えばそうでもなく、それらの経験には土地によって縛られた共通項のようなものがあるはずではなかろうか。直接カーヴァーに関する土地を訪れてみようと思立ったのも、そもそも、そうすることがカーヴァーやストーリーの理解を深めるのにまったく役に立たないはずはないと信じていたからであり、土地と経験の結びつき、つまり土地とカーヴァーの経験そして土地とカーヴァーのストーリーの結びつきを求めていたからであった。

6. ユリーカ

こうしてカーヴァーたちは 1960 年の夏にユリーカへやってくる (M. Carver 128)。カーヴァーは製材所でメアリアンは電話会社でオペレーターとして働き、住む場所を見つけそこでの生活を始める (132)。

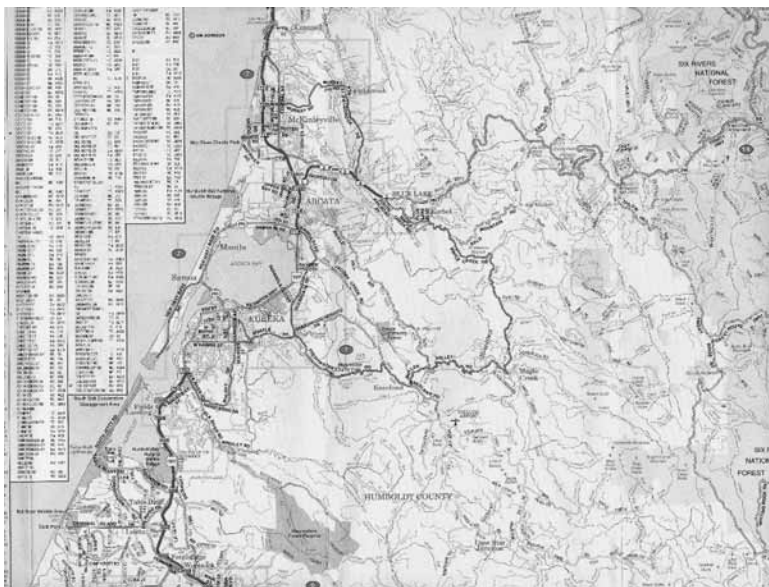


図版 16 フンボルト湾の漁港



図版 17 海で亡くなった水夫たちを追悼するため港に建てられたディック・クレイン (Dick Crane) 作の漁師像

ユリーカは海と山に挟まれた漁業と製材業が盛んな町であるが、以下の地図 (図版 18) に示されるような地形をしている。



図版 18 フンボルト湾とその周辺地域の地図 《出典：Redwood Coast. map (BC: GM Johnson and Assoc., 2012; print).》

町はフンボルト湾沿いにあるが、フンボルト湾は南北から細長く延びる砂州で覆われ、北太平洋へつながる出口部分の幅は現在の地形で見ても 500 メートル程しかない。この地形のためフンボルト湾はヨーロッパ人による北太平洋岸への探検が 16 世紀には始まっていたもののその場所を特定づけることができず (Davidson 1), 1806 年にロシア・アメリカ会社 (Russian-American Company) に雇われたアメリカ人ジョナサン・ウィンシップ (Jonathan Winship) がこの湾に入ったという記録はあったものの (11), 開拓地の設立につながるその湾の再発見がなされるのは、1850 年 3 月である (16)。1850 年と言えば、1848 年の 1 月に、サクラメント近郊コロマ (Coloma) のサッターズ・ミル (Sutter's Mill) でジェームズ・マーシャル (James Marshall) によって金が発見されゴールドラッシュが起こった 2 年後である。そのコロマでの発見を出発点とする金脈探索の広がりの中で、ユリーカに近いトリニティー川 (the Trinity River) 沿いでも、1849 年 5 月にピアソン・レディング (Pierson Reading) によって金が発見される (Hoopes 14)。当時そこへは内陸側のサクラメントから険しい山越えのルートで行くしかなかったが、もっと近く、物資を船で仕入れそこから金山へ輸送できるような拠点が海沿いに作られることが強く望まれていた (14)。そして 1850 年 3 月から 4 月にかけて、ダグラス・オットィンガー (Douglass Ottinger) 率いるローラ・ヴァージニア号 (the Laura Virginia) やサム・ブラナン (Sam Brannan) 率いるジェネラル・モーガン号 (the General Morgan) の一行がサンフランシスコから海ルートで海岸をつたい苦労の末湾への入り口とそこに広がる湾を見つけ (25-29), 同年 4 月にローラ・バージニア号の一員であるブーネ (Buhne) 2 等航海士が小さなボートで湾へ入ることに成功する (Hoopes 28-29; Davidson 15-16)。湾への狭い入り口部分は、現在では堤防で整備されて分かりやすくなっているが、当時は砂州が乗り出し南北の砂州に波が打ち付けられてできる碎浪が重なり合い、海から見ると碎浪がずっと続いて小船すら通れるほどの隙間もないように見え、さらにそこを通るときには浸水により船が何度も沈みそうになるほど危険であったという (Davidson 15-16)。そして、1850 年の 5 月に開発会社メンドシーノ (Mendocino) とユニオン (Union) の 2 社がユリーカの町を設立する (Hoopes 33-34)。ユリーカという町の名前の由来は諸説あるようだが、リンウッド・カランコ (Lynwood Carranco) とアンドリュー・ゲンツォーリ (Andrew Genzoli) は、メンドシーノ会社のメンバーがフンボ

ルト湾沖で町にできる場所を探していた際に、ジェームズ・T・リャン (James T. Ryan) が沼地の多かった土地のなかで地盤のしっかりした平らな土地を現在のユリーカのある場所に見つけ、仲間の元に戻ってきて「見つかった、場所が見つかったぞ (“Eureka, I have found a site.”)」と言ったエピソードにちなんでいるとする説が最も有力であるとしている (377)。名前の由来はどうあれ、長年見つからなかった地理的に狭い危険な入り口の奥にひっそり隠されたかのような、金山へと通じる拠点となる秘境の発見には、金を見つけた時と同じような喜びが伴ったはずである。

さらに他のアメリカの入植のストーリーにも大抵つきまとうように、その入植にも先住民インディアンとの紛争と彼らの排除という話が伴っている。図版 17 の写真中、漁師像の背後に見える島は、1860 年にインディアンの大量虐殺があったインディアン島 (Indian Island) である。当時インディアンによる牛泥棒などの被害に脅威を感じた白人が行ったものとされたが、インディアン島に住んでいたワイヨット族は牛を盗んだのとは別のおとなしい部族であったためなぜ彼らが殺されなければならないのか理由が不透明であった。どんな理由があったにせよ大量虐殺というだけで白人の入植にともなった暴力性や、身勝手さ、理不尽さを糾弾するには十分な題材であるが、近年では、インディアンから身を守ることを目的として結成された自警団組織が活動資金の提供を再度要求していたにもかかわらずそれになかなか応じなかった州議会にやきもきし、要するに一種のテロ行為のようにして政府を脅して金を巻き上げるためにおとなしいインディアンを見せしめに殺したのが事の真相であるとする説も出ているほどである (Rhode)。

秘境の地の開拓、金脈へのルート、インディアンに関する紛争と排除と虐殺の過去。そんな、アメリカ的な要素をその歴史として兼ね備えているといつてよい場所がユリーカである。

短篇「お願いだから静かにしてくれないか (“Will You Please Be Quiet, Please?”)」(短篇集 *Will You Please Be Quiet, Please?* に所収) はそのユリーカが舞台になっている。一見して順調な人生を送ってきた主人公が妻の過去の浮気を知ったことから、どうしてもそれが気になり心の中で修復できない亀裂となるが、離婚するほどの度胸もなく再び家庭へ戻っていく男の話である。不満があっても自力で打開することは初めから無理であるとさえ言わんばかりに不満を無理やり押し込めながら元の日常へ戻ってゆく。誰にでも起こりうるこ

とで、それを解決できない男が情けないだけのようにも一見思えるが、しかしそんなありふれた状況でもがんじがらめになって身動きが取れなくなるほど追い込まれてしまう可能性が現代の生活に潜んでいることが示されているとも言えるだろう。浮気を知ってそのすさんだ気分を一瞬でも紛らわせ、押し込められた欲望のはけ口を求めるかのように、この普段はまじめな高校教師の男はセカンドストリート（Second Street）という通りへ一夜の冒険をしにやってくる。今はこじんまりとした観光地街になっているが、スクレニカの伝記によると、かつてカーヴァーが住んでいた1960年ころは、まだ、酒場や賭けやビリヤードや売春取引などでにぎわう漁師や木こりたちの荒々しい辺境の町で、警察がコントロールできないドヤ街だったそうだ（75）。この男はバーに入ってカード賭博に興じるが、あまり深入りせずその場を抜け出し、酔っぱらいながら港をさまよっているときに黒人に足を踏んだという理由で殴られ、一夜の冒険もそこであっけなく終了させられる。



図版 19 ユリーカ市内のセカンドストリート

インディアン排除の歴史のある街を舞台として、登場人物が支配者の暴力性を内側にくすぶらせながら、被支配者のように自らも追い込まれているという設定は、ヤキマが舞台の「女たちに出かけると言ってくる（“Tell the Woman We Are Going.”）」に似ているが、こちらでは人は殺さず歴史の闇の力がより潜在下に深く埋もれており、それゆえ、カーヴァーが主要な登場人物として描こうとしたより多数派の普通のアメリカ人に近いという印象を受ける。

カーヴァーは、1960 年の秋学期にこの町の少し北のアーケイタ（Arcata）にあるフンボルト州立大学（Humboldt State College）へ転入し、夜は製材所で働きながらユリーカからこの大学へ通い始める（M. Carver 135）。



図版 20



図版 21

図版 20・21 フンボルト州立大学（Humboldt State University [旧 Humboldt State College]）

この大学でカーヴァーが師事したのは、ガードナーとアイオワライターズワークショップ（Iowa Writers' Workshop）の同門で共に PhD を取得しているリチャード・C・デイ（Richard C. Day）であったが、その時のガードナーとの大きな違いはデイが実際に短編を出版した経験を持つことであり、「そのことは実際に知っていて、生きて呼吸をする作家でも出版できるのだということを証明していた（“That proved it [publishing] could be done by someone you actually knew, a living, breathing writer.”）」（135）とメアリアンも書いているように作家を目指すカーヴァーにとっては刺激的な存在であったことだろう。

ところでカーヴァーが大学に通い始めたこのころは、ニクソンとケネディーの選挙戦がくりひろげられていた。カーヴァーもメアリアンもケネディーを応援していたようで、メアリアンは、テレビ討論でのニクソンの様子を、「ひどく具合が悪そうに見える、固形おしろいを象の皮のように分厚く塗りたくっているように見えた（“Nixon looked like death warmed over, his pancake makeup as thick as an elephant's hide.”）」（137-38）と描写している。これは 1960 年 9 月 26 日に CBS で行われた計 4 回のテレビ討論中、有名な第 1 回目での出来事である。「固形おしろい（“pancake makeup”）」とは、夕方に伸

び始めた髭を隠すためにニクソンが間に合わせで顔に塗っていた「レイジーシェイブ (“Lazy Shave”)」(直訳すると、「無精な髭剃り」)と呼ばれる化粧品だそうだが、照明の熱で汗をかきおしろいが落ちて髭が見えてしまい、インフルエンザが治りきらない微熱のある状態で、しかも車を降りるときに古傷のあるひざを痛め体調も悪く、さらに灰色のスーツがセットの背景の色に溶け込み灰色の肌色ともマッチし、まさに死人のような生気のなさが強調される印象を与えてしまった。週末に休息をとって小麦色に日焼けしカメラ映りにも気を配り準備万全でのぞんだケネディーと、イメージで大差をつけられ、この出来事は以後マスコミでのイメージ戦略が選挙戦の勝敗に大きく影響するものとして重視される傾向を強めていくことになる (“The Kennedy-Nixon Debates”)。比較的下層の家庭に生まれ育ち経済的に苦勞する人々を描いたカーヴァーは一見したイメージ通り生粋の民主党支持者であったというが、彼もそのイメージに素直に影響をうけてケネディーに大きな期待を寄せていた国民の1人であった (M. Carver 138)。

フンボルト州立大での学生生活がわずか半年経過したところで、カーヴァーは、デイの創作クラスには魅力を感じていたようだが、創作コース以外はむしろチコ州立大より魅力に欠け、自らにさほど関係のないことに時間を割かれる大学生活を退屈と感じるようになったようだ (135)。夢を実現するには回り道などしてはいられないという発想であるが、一見関係が薄いと思われる学問も自分の教養を高め、間接的には自分のためになるといったような考え方をする余裕はなく、夢を非常にストレートに、悪く言えば短絡的に追求する。もちろんその姿勢の背後には経済的にひっ迫した事情が大きな理由としてあったのであろうが、そういう追求をする気質も内面的な要因としてあったはずで、生きた夢の実現者が目の前にいたことがもしかしたらその傾向をなおさら強くしてしまったのかもしれない。フンボルト州立大で1年目を終えた1961年の夏には、家賃からも製材所の仕事からも解放されて創作に専念できるということで、メアリアンの父親が暮らすカナダとの国境近くにあるワシントン州の農村で、最低でも1年間暮らす計画を立てる (146)。しかし先にそのような計画がありながら、メアリアンは衝動的にもう1つ別の計画を立ててしまう。いつものように電話会社で働いていた彼女は、その退屈な仕事にうんざりし、ふと、もともと押さえつけていた教育への欲求が衝動的にはじけ飛ぶように、当初の計画の最低1年の期間が終わらない1961年の秋学期から入学するべく、フンボルト

州立大の事務へ出向き彼女の通っていた高校の事務へ連絡させ SAT（大学進学適性テスト）のスコアを確認させて入学を内定させた上に、連邦国家学生ローンと奨学金の申し込みをし、さらに、子供たちの保育所や家の手配まで、すべて1日で済ませてしまう（144-45）。彼女は代替案といっているが入学やローン借入れや家の賃借などのすべての申し込みや約束がキャンセルされてしまう可能性を前提にした無責任な計画の設定である。ところが、その代替案は結果として機能してしまう。つまり、わずか2か月半ほどでカーヴァーは田舎での退屈な生活に根を上げ、もう1度フンボルト大学での学生生活をしにカリフォルニアへ戻ってくるのだ（154）。パラダイスやユリーカへ移住した時のように、やはり堅実な計画には基づかない行き当たりばったりの軽はずみな移動の繰り返しである。ユリーカでの勤労学生としての生活を軽はずみに避けて田舎で生活をするという選択をするが、その選択をもさらに軽はずみに避けてカリフォルニアに戻ってくるという選択をする。軽はずみな選択を軽はずみに避けようとした結果、アーケイタで自らも学生として暮らすというメアリアンの無謀で衝動的であるという点で軽はずみな計画と奇しくも一致して、どれも軽はずみな選択ばかりであるがすべてが組み合わさると家や大学の申し込みについてキャンセルすることもなく、再び大学生としての生活を続行するという堅実な選択に戻ってきてしまう。この事情を知らず移住の経歴だけ見ていると、夏の間だけ生活費を浮かせるためメアリアンの実家へ戻り、休学せず秋学期からはより近いところからメアリアンとともに大学へ通っているため、一見、建設的な計画に基づいて現状の利点を生かしながら将来を見据えた堅実な生活をしているようにも見えるが、実はその結果を導いたのは軽はずみな選択の奇妙な組み合わせであるということがカーヴァーらしくて面白い。

《注》

- (1) メアリアンは家賃が無料であったと言っているが (M. Carver 86), カーヴァーは月に 25 ドル払ったと言っている (*Fires* 40)。メアリアンによれば、 Chico で 2 番目に暮らしたアパートの家賃が月 60 ドル、3 番目に暮らしたアパートは彼らには高めの月 90 ドルとのことであるから (M. Carver 111), 無料でなくとも 25 ドルは格安ではある。
- (2) 以下本文中に掲載の写真は、2013 年度の本学在外研究員期間に、著者自身が撮影したものである。
- (3) アメリカで中絶が合法化されるのは、1973 年ロー対ウェード裁判 (Roe vs.

Wade) で、中絶を不当に規制する州法を違憲とする連邦最高裁の判決が下されてからとなる。

- (4) ジェントリーとスタル (Gentry and Stull) の年表によれば、カーヴァーがパラダイスからチコへ引っ越したのは 1959 年の 6 月とされているが (xxi), メアリアンは 1959 年の 1 月から 5 月 25 日のカーヴァーの誕生日の間の期間で、「冬がまだ過ぎきらないころ (“As winter lingered on”)」(102) にチコへ移動したとしており (M. Carver 101-03), こちらの情報に依拠した。
- (5) その内容の印象から勘違いしたのか, メアリアンはタイトルが「月への打ち上げ (“Moon Shots”)」であると言っている (M. Carver 117)。

引用文献

- Adelman, Bob, and Tess Gallagher, eds. *Carver Country: The World of Raymond Carver*. New York: Arcade, 1990. Print.
- Carranco, Lynwood, and Andrew Genzoli. “California Redwood Empire Place Names.” *Journal of the West* 7.3 (1968): 363-79. Print.
- Carver, Maryann Burk. *What It Used To Be Like: A Portrait of My Marriage to Raymond Carver*. New York: St. Martin's, 2006. Print.
- Carver, Raymond. *Fires: Essays, Poems, Stories*. 1983. New York: Vintage, 1989. Print.
- _____. *Will You Please Be Quiet, Please?*. 1976. New York: Vintage, 1992. Print.
- Davidson, George. *The Discovery of Humboldt Bay, California*. San Francisco: Geographical Soc. of the Pacific, 1891. Google Books. Web. 23 Sept. 2015. <<https://books.google.com/>>
- Gallagher, Tess. “Carver Country.” Introduction. Adelman and Gallagher 8-19.
- Gardner, John. *On Moral Fiction*. New York: Basic, 1977. Print.
- Gentry, Marshall Bruce, and William L. Stull, eds. *Conversations with Raymond Carver*. Jackson: UP of Mississippi, 1990. Print.
- Hoopes, Chad L. *Lure of Humboldt Bay Region: Early Explorations, Discoveries, and Foundations Establishing the Bay Region*. Dubuque: WM. C. Brown, 1966. Print.
- “The Kennedy-Nixon Debates.” *History.com*. A & E Television Networks, 2013. Web. 23 Sept. 2015. <<http://www.history.com/topics/kennedy-nixon-debates>>
- Sklenicka, Carol. *Raymond Carver: A Writer's Life*. New York: Scribner, 2009. Print.
- “Mission and History.” *Maryhill Museum of Art*. Maryhill Museum of Art, 2015. Web. 23 Sept. 2015. <<http://www.maryhillmuseum.org/discover/about-maryhill-museum-of-art/mission-and-history>>
- Rhode, Jerry. “Genocide and Extortion.” *The North Coast Journal* 25 Feb. 2010. The North Coast Journal. Web. 23 Sept. 2015. <<http://www.northcoast>>

「レイモンド・カーヴァー」というアメリカを追いかけて (2)

65

journal.com/humboldt/genocide-and-extortion/Content?oid=2130748

余田剛, 『『レイモンド・カーヴァー』というアメリカを追いかけて (1)』, 『言語と文化』 第 12 号 (2015) : 87-114. Print.

(アメリカ文学／法学部准教授)